

新約聖書とその思想 —パウロ研究（6）—

S. Ashina

<前回>オリエンテーション

新約聖書は、キリスト教思想の基盤であり、キリスト教思想研究を志す者には、聖書原典を読む能力（語学・聖書学・聖書神学など）が求められる。本演習ではギリシャ語原典の講読を通して現代聖書学の基礎の習得を目指す。

本年度は、昨年度に続き、多岐にわたる新約聖書の思想の内から、パウロのローマの信徒への手紙の第4章を講読し、パウロのテキストに即しつつその思想の内実へと迫ることを試みたい。本演習では、各種の辞書の使用法から、聖書注解書の扱い方といった、聖書テキストを読解する上で必要となる基礎的作業の習熟を目指す。受講者には、パウロの思想の理解を深めるために、Cranfieldの注解書（ICC）などの注解書の参照が求められる。また、N.T.Wright, *The Paul Debate. Critical Questions for Understanding the Apostle*, SPCK, 2015. の講読を並行して行う予定である。

<演習予定>

- ・ 10/3：オリエンテーション＋導入
- ・ 10/10：ローマ書の1章～5章を振り返って＋分担確定（テキストの配布）
- ・ 10/17, 24, 31, 11/7, 14, 21, 28, 12/5, 12, 19, 26, 1/9, 16：演習
基本箇所の読解＋注解書／研究文献→分担し発表する。

<導入1：パウロと初期キリスト教>（2017年度前期・特殊講義2から）

（1）パウロ神学の基本構造

1. 核心点
 - ・ キリストの十字架と復活における神の救済の活動
 - ・ 神の救済活動の一環としての異邦人伝道 → 自らの異邦人伝道の意義
2. 諸論争の文脈に即した議論の展開：使徒としての正統性の弁明
 - いくつかの基本的な原則の存在、しかし首尾一貫した体系化はなされていない。

Rom1.1：

Παῦλος δοῦλος Χριστοῦ Ἰησοῦ, κλητὸς ἀπόστολος ἀφωρισμένος εἰς εὐαγγέλιον θεοῦ,

アガンベン『残りの時 パウロ講義』岩波書店。

・「パウロス・ドゥーロス・クリストゥ・イエスウ、クレートス・アポストロス・アフオーリスメノス・エイス・エウアンゲリオン・テウ」（10の言葉）

「パウロ、僕＝奴隷、救世主イエス」

・「救世主イエスの僕として召され、神の福音を告げるために使徒として選り分かれたパウロ」（cf. 「召されて使徒となった救世主イエスの僕」）

・「サウル」・「大いなる者」（サウロス、王家の名）と「パウロ」・「小さい、取るに足りない」（使徒がメシア的な召命を十全に引き受ける瞬間に与えられるメシア的な渾名。姓ではない）。王家から賤民へ。

・メシア的な僕と定められた瞬間に、奴隷と同様に、名前を失って、たんなる通り名で呼ばれねばならない。使徒である前にまずもって奴隷

・パウロが知っているのは、イエス・キリストという名前の人物ではなく、救世主のイエス、イエスという救世主なのだ。「何千年にもおよぶ習性は、クリストスという言葉

訳しないままにしてきたことによって、ついにはパウロのテキストから「メシア」という語を消滅させる結果となってしまった」(26)

「「キリストス」という語のもともとの意味についてのわたしたちの忘却をパウロのテキストに投影しているだけだ」(30)

3. 普遍宗教としてのキリスト教：ユダヤ人と異邦人の全体に妥当する救済と真理

1) 救済史：旧約聖書の伝統の上に、イエスの宗教運動とその後の弟子集団、その役割を位置づける。

ユダヤ主義の克服とユダヤ人の新しい理解

律法・旧約の位置：預言と成就

→ キリスト教起源神話の成立＝ユダヤ教起源神話の改訂

2) 贖罪論：キリストの十字架と復活の意味、キリストとしてのイエス

3) 教会論：弟子集団（家の教会）、多様性と統一（キリストの体としての教会）

4. 新しい歴史理解＝救済史（旧約と新約の統合）：キリスト教起源神話への寄与。

異邦人の救い → ユダヤ人の救い → 被造物全体の救い

5. 救済とは何か

・イエスの十字架（死）と復活への参与 → キリストと共に死にそして生きる

神秘主義的あるいは密儀宗教的。法律の意味はむしろ二次的

・罪の力からの解放：古い存在から新しい存在への変容・移行

移行は信仰においてすでに始まりつつあるが、終末（再臨）における完成する。

6. 救済に参加した人間は何をするか。

・自然な帰結としての倫理的な生活

律法的生は前提ではなく、結果。模範的な市民であり得る。

・キリストの体の一体性（教会）への参与

7. いわゆる信仰義認論：「義の認められる」に止まらず、「義となる」。cf. ルター

ルターの伝統におけるパウロ理解に対して。

8. パウロ神学における義認論の位置づけ

・神秘主義（あるいはキリストとの内的関わりの経験）から信仰義認論へ

A・シュヴァイツァー『使徒パウロの神秘主義』→武藤一雄『神学と宗教哲学の間』

（創文社、1961年）

第五章「信仰と神秘主義」

・「パウロには、神—神秘主義というものは存在せず、キリスト神秘主義があるのみである。人間が神との交わりに入るのは、キリスト神秘主義をとおしてなのである」。そして、このパウロの神秘主義の根本思想は、なによりも、「わたしはキリストにある」(Ich bin in Christo) という定式——ただしシュヴァイツァーによれば、「キリストにある」ということは、より根本的にいって、「キリストと共に死に且つよみがっていること」(ein Gestorben- und Auferstandensein mit Christus) を表現する語であるといわれる——で以て言い表されている、といわれる。」(371)

9. The doctrine of righteousness by faith is therefore a subsidiary crater, which has formed within the rim of the main crater --- the mystical doctrine of redemption through being-in-Christ.

Carsten Claussen, "Albert Schweitzer's Understanding of Righteousness by Faith according to Paul's Letter to the Romans," in: Daniel Patte und Cristina Grenholm (eds.), *Modern Interpretations of Romans. Tracking Their Hermeneutical/Theological Trajectory*, Bloomsbury, 2013, pp.87-107.

<聖書テキスト>

「異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。」(ローマ 15:16)

「16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。」(ローマ1)

「6 わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7 死んだ者は、罪から解放されています。8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9 そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10 キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11 このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」(ローマ6)

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」(2コリント4:16)

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(2コリ5:17)

(2) パウロ的キリスト教

10. 「前の時代に活躍したパウロの宣教の成果はどうなったであろうか。確認できるのは、パウロの弟子たちともいべき後継者たちが、使徒の遺産を継承・発展させていったことである。そのためにも、パウロの手紙が集められ、編集され、学ばれた。

それが、新たに独立したキリスト教のアイデンティティ確立のためには、最大の策の一つであった。なぜかと言えが、パウロが提示した、律法(トーラー)を超越した救いの教

説が、キリスト教をユダヤ教から分離するのに最適であったためである。そのために、一時代前はマイノリティでしかなかった「跳ね上がり者」で「急進派」のパウロの教えが、七〇年以降、にわかに脚光を浴び始めたのである。律法に従い、割礼を受けてユダヤ人になることを全く必要としない、しかしイスラエルの伝統直伝の救いを確証する教えこそ、皆の望んだイデオロギーだったためである。

しかしこれは、おそらくパウロ自身の意図とは全く異なるものである。彼は決して自らをユダヤ教から切り離そうとはしなかったどころか、自分こそユダヤ教の神の新たな啓示に最も忠実であろうとする者と理解したからである。」(佐藤、151-152)

11. パウロ神学のパウロ以降の展開。コロサイ書、エフェソ書における、宇宙的キリストへ。

「1:13 御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。14 わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。15 御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。16 天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。17 御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。18 また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。19 神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、20 その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」(コロサイ/80)

年代)

「1:3 わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。4 天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。5 イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。6 神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。7 わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。8 神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、9 秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。10 こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。11 キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。12 それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。13 あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。14 この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。」(エフェソ/90年代)

↓

古代地中海世界・ヘレニズム世界の宗教文化的状況において。

クリスマスの意識化。

キリスト教起源神話の論理と宇宙論

教会暦＝時間の形態化。ここで、キリスト教は生として完成した。

<概論講義：儀礼と sacrament>

キリスト教の信仰に生きる＝質的にリズム化された時間感覚（時間経験）をもって生活すること＝宇宙・歴史全体のリズムと個人的生のリズムの同調、永遠との関わりにおいて生きる生命の時間性

9. 「宗教とは生（生活、生涯、生命）の形態化である」。三つの相。

信仰	→	究極的関心・自己同一性	→	行為の形態化
聖なるもの	→	ヒエロファニー	→	空間の形態化
儀礼	→	ヒエロファニー	→	時間の形態化

<参考文献>

1. コンツェルマン『原始キリスト教史』日本基督教団出版局、『時の中心——ルカ神学の研究』新教出版社。
2. 佐藤研『聖書時代史 新約篇』岩波書店。
3. 荒井献『イエスとその時代』岩波新書、『イエス・キリスト』講談社。
『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波書店。
『使徒行伝 上中下巻』新教出版社、1977/2014/2016年。
『新約聖書の女性観』岩波書店。
4. G・ボルンカム『パウロ その生涯と使信』新教出版社（原著1969年）。
5. E・ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社（原著1969年）。
6. E・P・サンダース『パウロ』教文館（原著1991年）。

7. 荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972年。
8. 佐竹明『使徒パウロ 伝道にかけた生涯 新版』新教出版社、2008年。
9. 青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡 イエス・パウロ・その後』新教出版社、2013年。
10. 土戸清『初期キリスト教とユダヤ教——ヨハネ福音書研究の諸課題』教文館。
11. 荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972年。
12. 佐竹明『使徒パウロ 伝道にかけた生涯 新版』新教出版社、2008年。
13. 清水哲郎『パウロの言語哲学』岩波書店。
14. ヤーコブ・タウベス『パウロの政治哲学』岩波書店。
15. アラン・バディユ『聖パウロ——普遍主義の基礎』河出書房新社。
16. ジョルジョ・アガンベン『残りの時——パウロ講義』岩波書店。
17. 宮田光雄『国家と宗教』岩波書店。
18. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.
19. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul* (Third Edition), T & T Clark, 2015 (2004).
20. Dieter Georgi, *Theocracy in Paul's Praxis and Theology*, Fortress Press, 2009.

<導入2>

(1) ローマの信徒への手紙 (新共同訳)

第1章

◆挨拶

1:1 キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、——2 この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、3 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。5 わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。6 この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。——7 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

◆ローマ訪問の願い

8 まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。9 わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださることで、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、10 何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。11 あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。12 あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです。13 兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところで何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。14 わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15 それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

◆福音の力

16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって

生きる」と書いてあるとおりです。

◆人類の罪

18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。22 自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、23 滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。24 そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。25 神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。26 それで、神は彼らを恥ずべき情欲にまかせられました。女は自然の関係を自然にもとるものに変え、27 同じく男も、女との自然の関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、男どうしで恥ずべきことを行い、その迷った行いの当然の報いを身に受けています。28 彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。29 あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、30 人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、31 無知、不誠実、無情、無慈悲です。32 彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています。

第2章

◆神の正しい裁き

2:1 だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。2 神はこのようなことを行う者を正しくお裁きになると、わたしたちは知っています。3 このようなことをする者を裁きながら、自分でも同じことをしている者よ、あなたは、神の裁きを逃れられると思うのですか。4 あるいは、神の憐れみあなたが悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。5 あなたは、かたくなで心を改めようとせず、神の怒りを自分のために蓄えています。この怒りは、神が正しい裁きを行われる怒りの日に現れるでしょう。6 神はおのおのの行いに従ってお報いになります。7 すなわち、忍耐強く善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠の命をお与えになり、8 反抗心にかられ、真理ではなく不義に従う者には、怒りと憤りをお示しになります。9 すべて悪を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、苦しみと悩みが下り、10 すべて善を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。11 神は人を分け隔てなさいません。12 律法を知らないで罪を犯した者は皆、この律法と関係なく滅び、また、律法の下にあって罪を犯した者は皆、律法によって裁かれます。13 律法を聞く者が神の前で正しいのではなく、これを実行する者が、義とされるからです。14 たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。15 こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。彼らの良心もこれを証ししており、また心の思いも、互いに責めたり弁明し合って、同じことを示しています。16 そのことは、神が、わたしの福音の告げるとおり、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかになるでしょう。

◆ユダヤ人と律法

17 ところで、あなたはユダヤ人と名乗り、律法に頼り、神を誇りとし、 18 その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています。 19 -20 また、律法の中に、知識と真理が具体的に示されていると考え、盲人の案内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手、未熟な者の教師であると自負しています。 21 それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。「盗むな」と説きながら、盗むのですか。 22 「姦淫するな」と言いながら、姦淫を行うのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿を荒らすのですか。 23 あなたは律法を誇りとしながら、律法を破って神を侮っている。 24 「あなたたちのせいで、神の名は異邦人の中で汚されている」と書いてあるとおります。 25 あなたが受けた割礼も、律法を守ればこそ意味があり、律法を破れば、それは割礼を受けていないのと同じです。 26 だから、割礼を受けていない者が、律法の要求を実行すれば、割礼を受けていなくても、受けた者と見なされるのではないのですか。 27 そして、体に割礼を受けていなくても律法を守る者が、あなたを裁くでしょう。あなたは律法の文字を所有し、割礼を受けていながら、律法を破っているのですから。 28 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません。 29 内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。 その誉れは人からではなく、神から来るのです。

第3章

3:1 では、ユダヤ人の優れた点は何か。割礼の利益は何か。 2 それはあらゆる面からいろいろ指摘できます。まず、彼らは神の言葉をゆだねられたのです。 3 それはいったいどういうことか。彼らの中に不誠実な者がいたにせよ、その不誠実のせいで、神の誠実が無にされるとでもいうのですか。 4 決してそうではない。人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。「あなたは、言葉を述べる時、正しいとされ、／裁きを受けるとき、勝利を得られる」と書いてあるとおります。 5 しかし、わたしたちの不義が神の義を明らかにするとしたら、それに対して何とすべきでしょう。人間の論法に従って言いますが、怒りを発する神は正しくないのですか。 6 決してそうではない。もしそうだとしたら、どうして神は世をお裁きになることができますでしょう。 7 またもし、わたしの偽りによって神の真実がいつそう明らかにされて、神の栄光となるのであれば、なぜ、わたしはなおも罪人として裁かれねばならないのでしょうか。 8 それに、もしそうであれば、「善が生じるために悪をしよう」とも言えるのではないのでしょうか。わたしたちがこう主張していると中傷する人々がありますが、こういう者たちが罰を受けるのは当然です。

◆正しい者は一人もいない

9 では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。 10 次のように書いてあるとおります。「正しい者はいない。一人もいない。 11 悟る者もなく、／神を探し求める者もいない。 12 皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。

13 彼らののどは開いた墓のようであり、／彼らは舌で人を欺き、／その唇には蝮の毒がある。

14 口は、呪いと苦味で満ち、

15 足は血を流すのに速く、

16 その道には破壊と悲惨がある。

17 彼らは平和の道を知らない。

18 彼らの目には神への恐れがない。」

19 さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服

するようになるためなのです。20 なぜなら、律法を実行することによって、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。

◆信仰による義

21 ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。22 すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。25 神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。26 このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。27 では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。28 なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。29 それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。30 実に、神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義としてくださるのです。31 それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです。

第4章

◆アブラハムの模範

1 では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか。2 もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。3 聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。4 ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。5 しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。6 同じようにダビデも、行いによらずに神から義と認められた人の幸いを、次のようにたたえています。

7 「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、／幸いである。

8 主から罪があると見なされない人は、／幸いである。」

9 では、この幸いは、割礼を受けた者だけに与えられるのですか。それとも、割礼のない者にも及びますか。わたしたちは言います。「アブラハムの信仰が義と認められた」のです。10 どのようにしてそう認められたのでしょうか。割礼を受けてからですか。それとも、割礼を受ける前ですか。割礼を受けてからではなく、割礼を受ける前のことです。11 アブラハムは、割礼を受ける前に信仰によって義とされた証しとして、割礼の印を受けたのです。こうして彼は、割礼のないままに信じるすべての人の父となり、彼らも義と認められました。12 更にまた、彼は割礼を受けた者の父、すなわち、単に割礼を受けているだけでなく、わたしたちの父アブラハムが割礼以前に持っていた信仰の模範に従う人々の父ともなったのです。

◆信仰によって実現される約束

13 神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。14 律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたこととなります。15 実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。16 従って、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムのすべての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束

にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。17 「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。18 彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこのようになる」と言われていたとおりに、多くの民の父となりました。19 そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せない^と知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでした。20 彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。21 神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、確信していたのです。22 だからまた、それが彼の義と認められたわけです。23 しかし、「それが彼の義と認められた」という言葉は、アブラハムのためだけに記されているのではなく、24 わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。25 イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。

第5章

◆信仰によって義とされて

1 このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、2 このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。3 そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、4 忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5 希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。6 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。7 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。8 しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。9 それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。10 敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。11 それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

◆アダムとキリスト

12 このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。13 律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです。14 しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったので。15 しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。16 この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません。裁きの場合には、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。17 一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。18 そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下

されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。19 一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。20 律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。21 こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。

(2) ローマ書の構成

松木治三郎『ローマ人への手紙 翻訳と解釈』日本基督教団出版局、1966年。

A. 「まえがき」(1・1—17) :

「まず、教会への挨拶」(1—7)

「つぎに、手紙を書く理由」(8—15)

「さいごに、主題とテキスト」(16—17)

「この短いまえがきの中に、根本的には、すでにこの手紙で言おうとしているすべてのことが、言われている。したがってここにパウロの、そして新約聖書の、歴史的にも神学的にもきわめて重要な、言語と概念がでてくる。」(57)

B. 「第一編 信仰による神の義」(1・18—4・25)

神の義を、

「一 人間の罪と神の審き」(1・18—3・20)

「1 神の怒りの下にある異邦人」(1・18—32)

「2 すべての人間の審きとその規準」(2・1—16)

「3 審きの下にあるユダヤ人」(2・17—3・8)

「4 神の前に罪責を負う人間」(3・9—20)

「二 キリストにおける神の義の啓示として、説明し」(3・21—31)

「三 その聖書証明を試みる」(4・1—25)

C. 「第二編 人間と世界における神の義・救いの実現」(5・1—8・39)

「第三編 イスラエルの躓きにおける神の義」(9・1—11・36)

「第四編 信仰による人間の生活」(12・1—15・13)

「おわりに」(15・14—16・27)

3. パウロのレトリックと想定された読者

ユダヤ的伝統に生きている人あるいはそれを知っている人。

共通の知識から出発し、推論・類比によって、議論を展開する。

ユダヤ的伝統の否定論ではない、相対化ではあるが。